

令和6年度「熊本の学び」研究指定校事業 事業実績報告書

1 研究の内容

授業力向上 (○) ・道徳教育 () ・キャリア教育 () ・特別活動 ()
カリキュラム・マネジメント () ・その他 () (内容:)

2 学校の概要

＜児童（又は生徒）数・学級数（令和6年（2024年）4月現在）＞（単位：人）

プロジェクト校	児童生徒数	教員数	校長名	研究主任名
荒尾市立荒尾第一小学校	458	26	高田 みゆき	久間 由紀

3 研究主題

「子どもが学びの主体となる授業づくり」～一小版あらおベーシックの取組を通して～

4 研究主題設定の理由

本校では、以前から「あらおベーシック」の取組を行ってきた。児童が自分たちで授業を進めようとする意識の高まりや学び合いを通して協働的に学ぶ姿が見られるという成果がある一方で、教師側が単元や授業のねらいを明確にもてず表面的で形式的な授業になっていたり、児童が「問い」をもてず、受け身になっていたりしている課題も見られる。これらの実態から、熊本の学びとあらおベーシックをつなぎ、児童が自ら問いをもち、解決に向けて方法を選択し、学び合っていけるよう、児童が学びの主体となる授業づくりを行っていきたいと考え、主題を設定した。

5 研究の具体的な取組内容

(1) 授業づくり（学びの主体となる授業の工夫）

- ①単元デザインの工夫（児童との共有）
- ②学習過程の工夫（導入の工夫・解決活動の工夫・定着の工夫）

(2) 環境づくり（学級の基盤づくりの工夫）

- ①学級力向上
- ②学習規律づくり（聞き方・ノートづくり・板書・掲示グッズ）
- ③読書・家庭学習

(3) 連携づくり

- ①地域人材の活用
- ②総合的な学習の時間の見直し
- ③意識調査（教員・児童・地域）

6 目指す成果【検証方法】

- ・教師による授業改善が推進され、県学力調査の結果が県平均を上回る。
(県学力調査の結果より)
- ・主体的な児童の活動が促進される。(教師による見取り、児童アンケートより)
- ・地域と連携した学習活動の展開と学習に対する意識の向上が見られる。
(地域・保護者アンケートより)

7 研究実施の実際

時期(月)	実施内容
4月	グランドデザイン決定

5月	研究推進会議
6月	「熊本の学び」ステップアップ研修 各部会の具体的方策の検討
7月	校内研究授業及び授業研究会 研究推進会議
8月	「一小版あらおスタンダード」の見直しと作成 各部会の具体的方策の見直しと検討
9月	講師招聘研修
10月	校内研究授業及び授業研究会
11月	研究推進会議
12月	校内研究授業及び授業研究会
1月	公開授業
2月	本年度校内研修のまとめ 次年度に向けた課題の抽出
3月	研究推進会議

8 市町村教育委員会の取組の実際

荒尾第一小学校の要請に応じて、様々な指導助言を行った。

- ・ 5月 校内研修に参加し、あらおベーシックと熊本の学びについて、教職員に説明をした。
- ・ 6月 校内研修の授業研究会に参加し、指導助言を行った。
- ・ 9月 校内研修の授業研究会に参加し、指導助言を行った。
- ・ 10月 中間発表会に向けて案内状の作成や研究リーフレットの作成について指導助言を行った。
- ・ 12月 中間発表会に向けた事前授業に参加し指導助言を行った。
- ・ 1月 中間発表会に参加した。

9 研究の成果【検証方法】

【県学の結果より】

- ・ (国語) 全ての学年において県平均を下回った。
- ・ (算数) 5年生だけ県平均を上回ったが、他学年は県平均を下回った。

【i-check より】

- ・ 「授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか。」
〈昨年度〉 71.0% → 〈今年度〉 74.4%
- ・ 「自分の考えを発表する機会で、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表していましたか。」
〈昨年度〉 52.7% → 〈今年度〉 66.6%
- ・ 「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすることができる。」
〈昨年度〉 63.2% → 〈今年度〉 70.5%

【学校評価より】

- ・ (児童) 地域の方と一緒にする勉強や行事が楽しいと思いますか。 86%
- ・ (保護者) 学校はコミュニティ・スクールとして、学校・保護者・地域が一体となって行う活動(行事や授業)に取り組んでいると思いますか。 92%

1 0 研究の課題と今後の展望

○県学調の結果より、ほとんどの学年において県平均を下回っていることから、学力向上の点からの成果としては課題が残る。学校総体として、学力向上に対する取組及び効果的な指導方法などを検討していく必要がある。

○児童主体の授業については、あらおベーシックを基盤とした児童同士による協働的な学びの授業が展開できている。しかし、学級差があることや教師の介入（深い学びに誘うための揺さぶり）等については、来年度更なる研究が必要である。

○地域との連携については、本校がこれまで培ってきたコミュニティ・スクールの取組の有用性を児童も保護者も感じている。今後、学校のニーズに応じた更なる取組の推進が期待できる。

1 1 研究成果の普及

○1月の中間発表会に向けて、教職員の参加体制を12月の市校長会で、海陽中学校区の全職員参加と他中学校区の3名の参加を提案し、市内の多くの先生方に荒尾第一小学校の子供の学びの姿を市内へ広げることができた。

○荒尾第一小学校の取組の成果を市校長会や各種研修会等を通じて市全体に広げ、更なるあらおベーシックの定着を目指すとともに、次年度の研究発表に向けて継続したサポートを続けていく。